スポーツ社会学理論的研究のニュー・パラダイム

橋 本 純 一

1．はじめに：スポーツ社会学の理論的研究経緯のラフ・スケッチ

我が国における理論的研究の系譜を辿ってみると，社会や文化の変容を反映させながら推移していることがわかる。戦後20年程の体育・スポーツ社会学の導入期を経て，70年代から80年代前半をリードしてきたのは機能主義的アプローチであろう。有機体論アプローチともいえるこの方法は，個々の要素が全体の中で一定の役割を果たす「機能」として捉えるパラダイムで，当時の様々な社会制度〜政治，経済，教育等〜あるいはスポーツ制度において適合的であり，特にマクロなレベルでの説明にもてはやされた。スポーツ文化をスポーツ文化システムとして概念構成し，文化諸領域や諸制度とどのように相互連関的しているかを記述した菅原，佐伯らの研究（1984）にその典型を見出せよう。一方パーソンズに倣って分析モデル構成を試みた多々納秀雄（1997）や，スタティックな理論的アプローチではあるが，西村（1984），日下（1984），山本（1979）らの研究が代表的なものとしてある。

また，我が国では必ずしもメジャーな取り組みには至らなかったが，これらのアプローチと平行して，あるいは，先んじて熱心に推進されてきたのが，山本正雄をその出発点とするスポーツのマルクス主義的アプローチである。そこではいうまでもなく，スポーツ文化を構成し，参加する人々の意識や価値観＝上部構造がその人々の経済的・物質的状況とそれらを生み出す仕組み＝土台・下部構造によって規定されているということが理論的前提となっている。森川（1980），内海（1977），山下（1984）らの研究がその典型である。

また，フランクフルト学派のアドルノやマルクーゼ，さらにはフロイトらの理論を基に「解放をめざす」スポーツ理論を構築することを目的に書かれたベーメ（1980）の『後期資本主義社会のスポーツ』（唐木国彦訳）が1980年に出版された。それはそれまでの文化産業論におけるテクノロジー支配の強調の批判において，労働の非人間化＝スポーツの非人間化を訴え，スポーツのテクノロジーを強化する競争自体に異議を申し立て，スポーツの変革＝社会の変革をめざすネオ・マルクス主義的アプローチに位置づけられるものであった（佐伯；1979，草深；1986，岡崎；1991，影山；1984）。これらはプレイ論的スポーツ文化論のベーシックな視角を形成していった。

さて，ここ20年の間，海外において急速に台頭してきたのが英国において誕生したカルチュラル・スタディーズ（CS）の記号論的/エスノグラフィー的なアプローチであり，また一方，世界的に学問的インパクトを与えたのがエリアスらの歴史主義的アプローチである。我が国ではこれらの研究はまだ数えるほどである（前者に位置づけられるアプローチで研究を推進したのは橋本純一；1988，清水諭；1989，吉見俊哉；1994，松田恵示；1997，高橋豪仁；1994，甲斐健人；1998ら。後者では菊幸一；1993，1997），さらに海外の研究を見る限り，近年は，その理論的展開についても錯綜していて，様々な可能性と課題があるように思

われる。松村和則をはじめとして多くの研究者がそのあたりの課題に真摯な取り組みを展開している。しかし，いずれの場合も「グランド・セオリー」「グランド・ナラティヴ」を語るものではなく，むしろそのような理論を脱構築してゆくことをめざすものであることに間違いない。

ここではこのような比較的新しいパラダイムを踏まえて，さらなる理論的可能性について言及する。

2．モダン及びポストモダン状況下での「大きな物語」「誇大理論」

アルチュセールは社会の暗黙の物語をイデオロギーと呼んだが，さらにリオタールはそれを「大きな物語」という言葉で表現した。リオタール（1986）のいう近代（モダン）の「大きな物語」とは

原罪やあがないなどのキリスト教の物語，認識と平等による無知と奴隷からの解放の物語，具体的なものの弁証法というマルクス主義の物語，テクノ・インダストリアルな発展を通じての貧困からの解放という資本主義の物語

である。

また，ハーグリーブス（1993），橋爪（1995）を参照すると，ジンメルの形式社会学，デュルケイムの実証社会学，ウェーバーの理念系に基づく社会学，さらには先にあげたマルクス主義理論，フランクフルト学派の批判理論，パーソンズの構造機能主義システム理論などがモダンからポストモダンにかけてのグランド・セオリーと呼べるものであろう。

そして，リオタール（1986）はポストモダンの状況とは「大きな物語」が信じられなくなったことだという。しかし彼は「大きな物語」に対してそれを放棄しようとはいわず，それに対抗する複数の小さな物語が生まれるべきだという。そしてその複数の小さな物語のうちから，新しい思考のスタイルが生まれるという。橋爪も，現代を，現象学的社会学やエスノメソドロジー，消費社会の「戯れ」論，アナール学派の「社会史論」等，ミニ・パラダイムが乱立している状況と認識し，いわゆる「誇大理論」が不在の時代というのである。

3．新しい「文化の社会学理論」に求められるもの

① 知のあり方そのものを問い直すものでなければならない。

今や知にとって自明なあり方は存在しない。主意主義を超克しつつ，西洋近代の枠を越えた普遍知を志向して現れた構造主義は，その予想を越えて西洋近代的知の基盤となっていた理性を浸食し，その背後にあった暴力や権力への意志を暴露することによって，科学と思想の全領野に深刻なシニシズムを蔓延させてきた。

他方，デカルト的出発点に回帰しながら，彼が方法的懐疑の泥沼から脱出するために行ったコギト的飛躍を回避し，世界認識の所与性にあくまで忠実に厳密な学を構成しようと

した現象学は，解釈学的方法の導入を媒介にしていわゆる脱構築的な企図への道を開いた。東洋的知のあり方にも通じるこの方法は，しかし，その修得と行使に高度の達人性を要求するばかりでなく，ニーチェ的ニヒリズムの線に沿って高度に能動的でもあるため，複雑な社会状況にあっては，ときに暴力や権力への意志を是認したり合理化したりする。

② こうした危険性を回避するためには，近代化してきた文明の側ではなく，近代化されてきた生活者の側に立って，モダニティそのものの意味を問い直し評価するものでなくてはならない。

日米欧「先進」資本主義社会に実現した「豊かな社会」は，世界の中枢としてその構造を維持しようとする努力により，「構造的暴力」（第三世界には圧倒的大衆的貧困が顕在化し，「近代化」しようとする開発途上国の努力はすでに「先進」日米欧が痛めてきた地球生態系を痛め尽くそうとしている）を恒常化している。そしてこの文脈での世界管理の力学は，これらの社会に止むことのないストレスをもたらしている（弱い身体である子供，高齢者，女性ばかりでなく働き盛りの青壮年男子にすら「豊饒病理」を引き起こしている）。

モダニティとはこのような社会がそれ自身に言及する，高度に論理的に見えて複雑に屈折した言説である。

③ それゆえ，こうした言説を生み出す装置を自覚し，それに絡め取られることなく，いや現実には絡め取られようとしながらも執拗にその魔の手を解きほぐしつつ，常に意識して自己解放的に言説するものでなくてはならない。

1970年代のパラダイム革新時において，一方ではアルチュセールの試みに表される構造主義の影響を受けたマルクス主義によってイデオロギー論が蘇生され，他方ではピーター・バーガーの試みに見られるように，現象学的社会学を基礎とした近代の再批判を通して知識社会学が復興した。その後，前者はアルチュセールの想定した硬い社会構造から脱却するためにディスクール理論を大幅に取り入れ，イデオロギー的統制の矛盾をついて，かえって社会の不可能性すら主張するに至った。後者の試みはエスノメソドロジーやシンボリック相互作用論の試みのみならず，構造人類学の静的性格を乗り越えた人類学的研究の成果を取り込むことによって，社会をドラマとして，文字通り劇的に捉える方向へと展開してきている。

④ したがって，新しい理論は文化現象に関する自己解放的ディスクールを我々の身体によって伝播させ，文化批判を通じた文化創造を社会的な運動にしていくための，新しい「新しい社会運動の理論」でなくてはならない。

4．カルチュラル・スタディーズのパースペクティヴ

アンドリュー・ブレイク（1996）はその著書「ボディ・ランゲージ」において，カルチュラル・スタディーズの研究はその理念から，体系化されたものでもなく，それを目指すものでもないとする。それは超領域的な前提のもとに成立してきていて世界を新たな視点で理解するよう促す学問であるとし，歴史学，社会学，文学，映画論，女性学，精神分析学，などから引き出された方法論を利用して主にポピュラー文化に関する研究を中心に行うと同時に高級文化に関する再評価も行ってきた。

しかしカルチュラル・スタディーズの研究においても，ポピュラー文化の中核といえるスポーツに関しての研究が数えるほどしか存在しないのは驚くべきことだという。そしてその最大の原因をスポーツが言葉で説明するには及ばない「自然なもの」と理解されていることに求める。カルチュラル・スタディーズの多くの研究で用いられている方法はポスト構造主義，及び精神分析学と連携した研究から派生したものであり，世界を，言語からなる記号やディスクールがひとつづきに結びついて出来上がった説明可能なものとして捉えてきた。一方，スポーツは身体的行為であるが故に少なくとも言語に関する問題がある。つまりダンスや音楽と共に非言語的コミュニケーション活動にとっての共通の課題を抱えているという。

しかしアラン・トムリンソン（1998）は，カルチュラル・スタディーズのパラダイムは以下のようなスポーツ研究の可能性を暗示しているという。

① スポーツは権力関係のなかで行使される文化的な企て，すなわち支配階級による身体的規律を感化する方策として見なされるべきであり，また同時にスポーツは，革新的で，オルタナティヴな価値を表現してゆくことが可能な領域でもある。

② スポーツは単に「スポーツ」という字義的な理解にとどまるものではなく，入り組んだ社会的・文化的諸関係の一部分として見なされるべきである。

③ スポーツの文化的特性が把握されなければならない。すなわち，様々なスポーツは，世界観の競合を表現しているのであり，意識の様々な形として特定の社会集団の価値を体現しているのである。

以上のような可能性を追求したいくつかの国際的研究についてはすでに一定の評価や批判が存在する（MacAloon;1992，グルノー;1998，Mandel;1988，ホーン;1995，松村;1992，山下;1995，菊;1999etc.）が，そこでは多くの批判が，「ＣＳのパースペクティヴとしてのヘゲモニー論の緻密さ」の未掌握・誤読に基づくものであることがうかがえる。さらにはマカルーンの批判にトムリンソンが返答するように，国家レベル，国際レベルのパワー・エリートとカルチュラル・ポリティクスの構造についての理論化の欠如についても解消されつつある状況といえる（日本ではそのあたりの精緻な研究は今のところほとんど存在しないと思われる）。

5．「新しい」カルチュラル・スタディーズ

IRSS（Internatinal Review for Sociology of Sport）に納められている論文を鳥瞰してみると，近年，明らかにカルチュラル・スタディーズのスタイルで書かれたものが増加していることがわかる。スポーツ研究においてもカルチュラル・スタディーズがグローバル化し，他分野におけるカルチュラル・スタディーズと同様の誤解や方法論上の未熟さが散見され，将来的にも危惧される。ここで述べる「新しい」カルチュラル・スタディーズとは，以下に示すことを確認することである。

① 歴史的特殊性を無視して応用しうる華麗なテクスト主義でポストモダン理論的な傾向のカルチュラル・スタディーズからの脱却

② 一方で，もう一つのカルチュラル・スタディーズの主要なアプローチであるコンテクスト研究（政治的，歴史的，社会的，経済的コンテクストを分析し，文化からテクストに書き込まれたコードを解読する）にみられたような，特定の表象について全く無視する傾向からの脱却。

実際，読者とテクストの能動的な関係が意識されるようになってから，テクスト的研究とコンテクスト的研究の境界，つまり，表象と歴史の境界は壊れつつある。それはここ10年来のフーコーの功績に依拠するスタンスが影響しているものと考えられる（ターナー，1999）。

③ 理論の生産と理論的実践の場に関する省察/批判的考察が，具体的場の状況に即して生まれるという発想が重要。

E．サイード（サイード，1995）は理論（ここでの文脈ではカルチュラル・スタディーズの理論）について『世界，テクスト，批評家』の「旅する理論」のなかで，以下のように述べる。

「私が言っているのは，理論を批評的意識から区別すべきだということだ。ということはつまり，後者，批評的意識の方はある種の空間的感覚，理論を具体的状況に位置付ける計測能力のようなものだからである。これが意味するのは理論とはそれが生まれてきた時間と場所において捉えられるべきもので，理論がその時代の一部である，ということだ。理論は時代のなかで，時代のために，時代に応答することで生きる。その結果，理論を生んだ最初の場所を検証するためには，理論がその次に使われていった場所との比較が必要になる。つまり，ここでいう批評的意識とは，諸状況の間の差異を認識する能力のことである。どんなシステムや理論も，それを生み，それが移し変えられた状況を汲み尽くしてしまうことはできないという事実に，いかに気付くかが批評的意識の鍵

となるのだ」

④　さらにグローバル化の度合いを強めている資本主義システムによる必然から，事象の空間論的把握/理解がますます重要になっている。なぜなら空間/場所は常に人々のアイデンティティと結びついているからである。

空間/場所，空間性の強調は歴史性や時間性を無視しようとするものでは決してない。むしろ，社会を空間的に考え，社会と空間的なものとの間の節合＝分節関係を見ることは，歴史をリニアーな連続性としてみなす早急な理論的判断に疑問を呈することであり，そして歴史や時間を異質な諸契機が絡み合い，重なり合って織りなす多層的な構造として扱うことなのである。上野俊哉ら（2000）は，60年代後期にすでに，異なる社会や政治的関心そして権力関係における争いは空間的配置，あるいはその否定として表象され，認識されることをアンリ・ルフェーブルが唱えていることに注目している。

彼の議論をふまえ，現代における地理学の重要性を説いたのは，D．ハーヴェイ（1999）であった。彼はルフェーブルの読解を大胆に行い，「第三の空間」を唱えた。一般に物理的空間（たとえば自然）を「第一の空間」とし，社会的，人工的，また想像的に構築された世界を「第二の空間」と呼ぶことができる。「第三の空間」はそれら二つの弁証法的統合であったり，時系列的に後に来る解決ではない。また，特定の空間や具体的な場所を指してはいない。それはあくまでも戦略的な概念であり，それ自体が広い意味での運動「他者化に向かう動きとしての第三者化のはたらき」（Thirding-as-Othering）である。注）

6．おわりに：新しいスポーツ理論について

スポーツというきわめて肉体的・身体的なことを理論で語る，或いは言語化するということはどういうことを意味しているのか？

T．イーグルトン（1997）がいうように理論と＜実人生＞の間には何段階もの飛躍がある。それは以下のようになろう。

「メタ＝理論」－「理論」－「対象に関する批評・調査」－「対象」－「＜実人生＞」

イーグルトンは基本的に文学理論を想定しているのでこれをそのままスポーツ等に適用することには慎重でなければならない。がしかし，人間が記号をもつゆえ，不安定な状態にあり，そこにある種の想像エネルギーが宿っていること，また，理論が要されるのは，「物事が万事必ずしもうまくいっていない兆候」であると指摘していることは無視できない。「直面したいくつかの重大な問題によって新しい形の自己省察が強いられるところの行動実践」が理論である。すなわち，理論とは，人間が寄りかかる人間の活動であり，新しい自己省察であり，この自己省察を吸収することで，行動実践自体が変容されるのである。そして，ある歴史的な社会が変化/変容するとき，理論も変化/変容しなければならない。近年，我が国でももてはやされているブルデュー社会学理論は，この歴史的規定性を普遍的歴史の規制次

元に鍵止めしてしまう。いわば，ブルデュー理論は，「転移/変容の理論」ではなく，「保守の理論」でとどまるものである（山本；1999)。スポーツそのものの秩序が大きく変容するときにその理論化を困難にするのは，初期カルチュラル・スタディーズに散見されたポストモダン的軽さとブルデゥー理論に典型される社会規定性の硬さである。

資本主義的ハビトゥスと身体との関わりを見事に捉え得た（レスリングのように身体が直接接触するものを見る階層は下層階級で，ゴルフのように身体接触のなく距離のあるものは上流階級で，そこには荒々しさと精緻さの対立構造が心的にあるetc.）ブルデューは，構造化された構造とプラティークとの関係をとらえた。そしてその「構造化された構造がいかに再生産されるのか」の理論を提示しているが，現在に対する歴史的な規定を不在化している。

他方，フーコーは既存の秩序そのものの変容/転移を自らの理論形成に据えていた。われわれには構造化された諸構造に対して，夢想をはたらかせ，自らのハビトゥスに対して自らをずれさせる自己テクノロジーの自由プラティークが存在し，またその夢想と自己テクノロジーが，「構造化する構造」を設計しうる力を働かせうる，不在の第三者の位置になりうる場も存在するのである。

また，カルチュラル・スタディーズはポストモダニティ理論にも影響を受けているが，ポストモダン的パラダイムは「あらゆるものが多元性と戯れという観点から理解されている」とされ，階級やジェンダー，人種といった区分が単なる差異のひとつになって，権力関係を構造化することがないものである。また，ポストモダン的パラダイムは，ポストモダンティの「固有」な経験についての説明を，過剰に一般化する傾向，つまり，異なる社会や文化集団の構成員の，アクセスしうる経済資本と文化資本のかたちや量も違えば，置かれた状況も異なる経験の間にある重要な差異も脱コンテクスト化し，平板化してしまうような傾向がある。ここで重要なのは，「わたしたち」のすべてが，同一の「ポストモダン」的世界に生きるノマドでもなければ，断片化された主体でもないということである（Morley, D&K. Robins, 1995)。

いずれにしても，構造/制度は絶対のものではなく，変わりうるものであり，人間が生きていること，個々の意味世界をベースにして，人間が生きにくいような構造は変えるべきだという主張をしてゆける理論やパラダイムが求められている。そこでは，なるべく長いスパンでその変容を捉え，いろいろ引きずっている過去からのしがらみに対して，それがいつ，どのようなプロセスをもって，誰の責任で現在の構造/制度が出来上がってしまっているのかを明確にし，そのことを通じて，その制度が変わりうるための条件を明らかにしてゆくスタンスが求められよう。

注）カルチュラル・スタディーズの表明はしていないがこのコンテクストに位置付けられるのがH．アイヒベルグのスポーツ空間論（アイヒベルグ，1997）であるように思われる。

〔なお本論文は奈良女子大学での第51回日本体育学会体育社会学専門分科会シンポジウムにおける基調報告を修正加筆したものである〕

参考文献

ベーメ，J.O：唐木国彦訳（1980）後期資本主義社会のスポーツ．不昧堂出版．
Blake, A.(1996)Body language. London. Lawrence & Wishat.
アイヒベルグ，ヘニング：清水諭訳（1997）身体文化のイマジネーション．新曜社．
エリアス，ダニング：大平章訳（1995）スポーツと文明化．法政大学出版局〈Elias, N. and E, Dunning (1986)Quest for excitement: Sport and Leisure in the Civilization Process. Oxford: Basil Blackwell〉.
グルノー，リチャード：岡田猛他訳（1998）スポーツの近代史社会学．不昧堂出版．
ハーヴェイ，デヴィッド：吉原直樹訳（1999）ポストモダニティの条件．青木書店．
ハーグリーブス，ジョーン：佐伯聡夫他訳（1993）スポーツ・権力・文化．不昧堂出版〈Hergreaves, J(1986)Sport, Power and Culture. Polity Press〉.
花田達朗，吉見俊哉，コリン・スパークス（1999）カルチュラル・スタディーズとの対話．新曜社．
ジェリー，D・橋本純一ほか編（1995）スポーツ・レジャー社会学．道和書院．
橋本純一（1988）メディア・スポーツとイデオロギ～日米のプロ野球の記号論的研究～．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究７．道和書院．
橋爪大三郎（1995）社会学講義．夏目書房．
ホーン，ジョン（1995）ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズとスポーツ・レジャー研究　ジェリー他編　スポーツ・レジャー社会学．道和書院．
イーグルトン，テリー：山形和美訳（1997）理論の意味作用．法政大学出版会〈Eaglton, T (1990) The Significance of Theory. Basil Blackwell〉.
伊藤高広ほか編（1986）スポーツの自由と現代：上・下巻．青木書店．
Jordan, Glenn and Chris Weedon. (1995) Cultural politics. London: Blackwell.
影山健（1984）スポーツの政治的機能．菅原禮編，スポーツ社会学の基礎理論．不昧堂出版．
甲斐健人（1998）『底辺校』サッカー部員の『経歴』と階層再生産．日本体育学会第49回大会体育社会学専門分科会発表論文集．
亀山佳明編（1990）スポーツの社会学．世界思想社．
菊幸一（1993）「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学～日本プロ野球の成立を中心に～．不昧堂出版．
菊幸一（1997）スポーツ・ファンの暴力．杉本厚夫編　スポーツファンの社会学．世界思想社．
菊幸一（1999）スポーツ文化研究の方法と成果．井上俊他編　スポーツ文化を学ぶ人のために．世界思想社．
草深直臣（1986）スポーツと人間的自由．伊藤高弘他編　スポーツの自由と現代．青木書店．
日下裕弘（1984）明治期における「武士」的，「武士道」的野球信条に関する文化社会学的研究．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究４．道和書院．
リオタール，ジャン・フランシア：小林康夫訳（1986）ポスト・モダンの条件．水声社．〈Lyotard Jean-Francois, The Post Modern Condition, University of Minneapolis Press,Minn., 1984〉
MacAloon, J. (1992)'The Ethnographic Imperative in Comparative Olympic Research' in SSJ, 9-2.
Mandel, Jay R. & Joan D. Mandel(1988)Grass Roots Commitment: Baaketball and Society in Trinidad and Tobago. Caribbean Books.
松田恵示他（1997）スポーツ文化と教育．学術図書出版社．

松村和則（1992）「オープン・カルチュラルスペース」の現実的基盤を考える～マンデル夫妻，P．ブルデューの仕事に関連して～．第1回日本スポーツ社会学会発表資料．
松村和則（1993）地域づくりとスポーツの社会学．道和書院．
森川貞夫（1980）スポーツ社会学．青木書店．
Morley, David and Kevin Robins(1995). Space of Identity. London : Routlege.
長沼真澄（1978）文化的要求としてのスポーツ．唯物論　No.9
西村秀樹（1984）遊びの興業化過程に関する序論的研究．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究4．道和書院．
岡崎勝（1991）権力装置としての学校体育．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究10．道和書院．
佐伯聡夫（1979）文化論における遊戯論的パースペクティブの重要性について．丹羽勧昭編　遊戯と運動文化．道和書院．
サイード，エドワード：山形和美訳（1995）　世界・テキスト・批評家．法政大学出版会
庄司興吉，矢沢修次郎（1994）知とモダニティの社会学．東京大学出版会．
菅原禮（1984）スポーツ社会学講座：スポーツ社会学の基礎理論．不昧堂出版．
多々納秀雄（1997）スポーツ社会学の理論と調査．不昧堂出版．
トムリンソン，アラン（1998）スポーツ文化の社会学．日本スポーツ社会学会編　変容する現代社会とスポーツ．世界思想社．
高橋豪仁（1994）広島市民球場におけるプロ野球の集合的応援に関する研究．スポーツ社会学会編　スポーツ社会学研究第2巻．
ターナー，グレアム：溝上由紀訳（1999）カルチュラル・スタディーズ入門．作品社．
上野俊哉・毛利義孝（2000）カルチュラル・スタディーズ入門．筑摩書店．
内海和雄（1977）スポーツに関する試論－その本質的方法と把握の方法．科学と思想 No.26
山本正雄（1975）スポーツの社会・経済的基礎．道和書院．
山本清洋（1979）スポーツ行動モデル構築の基礎作業～役割と価値～　体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究8．道和書院．
山本哲士（1999）スポーツ・音楽の場所と文化資本．iichiko 52 : 97-104.
山下高行（1984）スポーツ技術論の研究視角の検討．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究3．
山下高行（1995）ポスト・フォーディズムのもとでのスポーツ・レジャー．ジェリー他編　スポーツ・レジャー社会学．道和書院．
吉見俊哉（1994）運動会の思想．思想845：137-162．